令和７年度 水稲栽培こよみ

目標	良い苗を作る		早く分けつさせる		無効分けつ防止	良い穂を作る			実りをよくする			土づくり
苗の育成過程	（稚苗栽培） 播種	田植	田植後一週間	田植後二週間	終止期 有効分けつ	出穂35日前	出穂18日前（幼穂約1cm）（20）	穂ばらみ期 出穂7日前	出穂期	落水期	成熟期	
主要品種別生育月日の参考目安 田植が5日前後すると出穂、成熟期はおおむね2日差がでる	あきたこまち	3/25	4/15	4/22	4/29	5/17	5/26	6/11	7/1	7/8	8/6	8/13	●土づくり 稲わらは年内にすき込み、地力増進のために堆肥を施用しましょう。 その後、珪力燐(粒)を施し、土づくりにつとめる。 （10a当り） 生わら 全量 堆肥(牛ふん) 500kg 珪力燐(粒) 10袋
	コシヒカリ	4/1	4/21	4/28	5/5	5/26	6/13	6/30	7/10	7/17	8/15	8/22	
	キヌヒカリ	4/11	5/1	5/8	5/15	6/8	6/20	7/5	7/18	7/25	8/22	8/29	
	みえのゆめ	4/17	5/8	5/15	5/22	6/15	7/1	7/18	7/29	8/5	9/5	9/12	
作業メモ	（ ）												●水田管理 耕起作業 第１回 ９月～11月 第２回 12月～２月 第３回 ３月
水管理	※健苗育成 育苗時に水をやりすぎない	田植直後は深水で、植いたみ防止 5cm	浅水で活着をよくし分けつ促進 3cm			間断かん水で根の健全化をはかる			浅水かん水				
主な作業とその要点	**播種** うす播きにする 苗立枯、ムレ苗防止 **種子消毒の徹底** 塩水選の実施 **更新種子の利用**	**害虫・葉いもち予防剤の育苗箱施用** 田植（栽植密度 30cm×18～21cm（50～60株/坪）細苗 3本～4本）	**除草剤散布（一発処理剤）**	ヒレタゴボウ	**中干しの徹底（茎数18本）になり次第** 後期除草剤散布（出穂35日前まで）	**葉いもち防除** 登熟向上資材の施用	**第一回穂肥** ※分施の場合 カメムシ防除 畦畔雑草の刈取	**穂いもち、紋枯病防除** 第二回穂肥 第一回穂肥の約10日後 ※分施の場合	**ウンカ カメムシ 紋枯病 穂いもち 防除** 出穂期間近になったら耐暑肥を施用する	早期落水をしない 落水は収穫前7日以降とし、	水分で26％前後で刈取 収穫 青籾が3～4粒残っている程度	**生わらの早期すき込み** 土改材散布と秋起し	

乾燥・調製の要点

1. 過乾燥の防止。仕上げ水分は14.5～15%を目標。
   （当地域の早期栽培は、乾燥終了後の余熱乾燥もあり仕上げ水分を高めに設定）
2. 高温で急激な乾燥は避ける。平均の毎時乾減率は0.8%を超えない。
   （胴割れ米の発生と食味劣化の防止）
3. 自動水分計の精度は毎年始めにチェック。乾燥中もこまめに測定。
4. 水分18%まで乾燥したら、数時間送風を止めムラを直し、その後乾燥再開。
5. 調製は、籾温度が常温に戻ってから。（籾温が高いと籾摺り時の肌ズレが多発）
6. ゴムロール間隔は0.8～1.2mmが基準。脱ぷ率は80～85%を目標。
7. ライスグレーダーの網目は1.85mm（Ｌ型）以上を使用。
   （整粒歩合80%以上とする）

ヒレタゴボウ対策

管内の水田にて「ヒレタゴボウ」という雑草が問題となっています。ヒレタゴボウは畑地雑草のため、湛水している状態ではあまり発生しませんが、主に田面露出地点や、中干し時に発生が見られます。

ヒレタゴボウは収穫期まで長期間にわたり発生が続きますが、中干し時は初中期一発除草剤の効果がリセットされるため、十分に防除するには初中期一発除草剤と中後期除草剤との体系処理が必要となります。

詳しくは、冊子13ページの「ヒレタゴボウ対策について」をご確認ください。

白未熟粒軽減対策

1. 登熟期の窒素栄養を高める
   ◎登熟期の栄養窒素が下がると白未熟粒が発生しやすくなります。
   高温年では穂肥を多めに施用することが効果的です。
2. 登熟期の高温対策
   ◎白未熟粒軽減対策として「水管理」が重要です。
   穂揃い期までは湛水管理、登熟期間中は間断かん水を基本としながらも、できるだけ新鮮な水の供給を随時行うよう心がけましょう。

このページを切り取り、見やすい所に貼っておくと、より便利にお使いいただけます。